

第一問 左は、内山節『子どもたちの時間』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

幼年期の記憶^イには、記憶されたものが全体とどんな関係をもっているのかとか、その記憶がどんな前後関係をもっているのか、というようなことがふくまれていないと私は考えます。ところが少年期の記憶^ロは、それがどんな関係のなかのできごとだったのかということを記憶している。この記憶の違いに、私は幼年期から少年期への移行が表現されていると考えてきました。なぜなら、このことは、関係をとおしてものごとをとらえるようになったことを示しているからです。

本当なら、関係する世界の認識が深まっていくことのなかに、少年時代の成長をとらえることができるはずです。どのような関係のなかで自分は存在しているのか、をみつけだしていく子どもたちは、自然や社会との新しい関係を築きながら、その関係のなかで思考している自己や、行動している自己を発見していくのです。

ところが、関係のなかのこのような成長は、現代の社会では、^Aおそらくうまく展開していくことはないでしょう。むしろ逆に、自分一人で生きていかなければならない自己を発見していくプロセスが、今日の少年時代の「成長」になっているようにさえ思われます。

この過程を時間論の視点からみていくとどうなるのでしょうか。そのことだけしか覚えていない幼年期の記憶は、その場面だけの時間の記憶であったように私には思えます。つまり、その時間だけのことが、鮮明に記憶されているのです。あるいは、その時間だけが、今日もなお甦^{よみがえ}るだけの価値を持っているのです。

どうしてなのでしょう。それは、おそらく、その時間が自分にとっては新鮮な時間の創造だったからでしょう。そのときの自分にとっては、記憶に残るほどの価値ある時間の創造だったといってもかまいません。

その時間の創造は、自分と他者との関係が作りだしたものです。例えば、他者とは果実の実であったり、谷川の沢ガニで

あったりしたのですが、そのような他者と関係をもった自己が、おそらく何かに心を動かされながら、記憶に残る時間を創造していたのです。

とすれば少年期の記憶は、他者との関係がもっと複雑になっていたことがわかります。なぜ自分がそのような場所にいたのかとか、全体のなかのどこの位置に自分がいたのか、というようなことが記憶されているということは、いろいろな関係のなかにそのときの自分がいたことを、少年は認識していたことを示しています。

そして、そのことが記憶されているということは、そこに**当時の自分**^Bにとっての鮮烈な時間の創造があったことに変わりないでしょう。ただし、時間創造のパートナーである他者は、単なる木の実や谷川の沢ガニではなく、そのような状況をつくりだしたさまざまな他者に変わってきているのです。つまり、他者のなかに、家族関係とか社会関係というようなものまでが入ってきていて、そのような諸関係としての他者と関係を結んだとき創造された時間が、記憶されているのです。

とすれば、もしもより多様な他者との関係をみつけていくことが、本当の少年時代の成長であるとするなら、それは、他者との関係で創造されていく時間が、より複雑なものになり、より深く、より多様なものになっていくことのはずです。こうして、私たちは、自分はさまざまな時空が重なり合った世界に存在していることを、認識していきます。あるいはその時空とともに私たちの思考があり、行動があることをみつけていくでしょう。

より大きく、深い関係とともに存在している自己を発見していくこと、このプロセスのなかで、少年は青年になっていくのです。

ところが現代社会のもとでは、このプロセスが失われています。なぜなら現代の私たちは、未来の自分の時間を他者としてつかみ、この他者との関係で現在の自分の時間を創造するという、習慣を身につけているように思えるからです。本来の他者であるはずの社会も自然も他の人々も、一面ではこの時間創造のための単なる前提であり、他面では手段になっているにすぎません。私たちは、自分のために時間を創造するようになったのです。本来の他者との関係のなかで時間が創造されるのではなく、これから生存しつづける自己という「他者」との関係のなかで、時間をつくりだしつづけるようになりました。

ここに裸にされた現代の個人の姿があるといってもよいでしょう。自己のために自己を創造する個人、自己の時間のために自己の時間を創造する個人が、登場してきたのです。

とすると、このような現代の個人たちは、どのようなかたちで、時間を創造しているのでしょうか。時計に示された客観的な時間秩序を受け入れ、その時間を、合理的に、有効に配分し消費することによってです。

ここに、きわめて屈折した現代人の姿があるように思われます。一方では現代の私たちもまた時間を創造しつづけています。将来の自分の時間を「他者」として、この他者との関係を結ぶことによって時間を創造するのです。ところが、この時間創造の前提として、けっして創造されることのない時間、つまり客観的な時間秩序でしかない、時計に表現された不可侵の時間を受け入れます。そのことによって、現代の時間に支配されながら、そして時間に支配されているがゆえに、時間を創造するために、時計の時間を配分し、消費していくのです。

「中 略」

大地の上に人間が誕生して以降、長い間人間たちは、時間は循環すると感じながら暮らしていました。朝になれば、昨日と同じ朝が還ってくる。春になれば、昨年と同じ春が還ってきたと感じながら、人々は暮らしていたのです。森では老木が倒れ、若い木々が前と同じ森をつくりだし、川の水は永遠の循環をとげながら存在していました。

小さな時間循環も、大きな時間循環もあります。時間はたったひとつのものではなく、さまざまな時間循環とともに、多様に存在していたのです。

自然や、人間たちの共同の営みが、このような時間世界を成立させていました。自然の移ろいが循環としてとらえられたのは、人間たちが、自然とともにある循環系の暮らしをしていたからです。おじいさんのように歳をとり、お父さんのように、お母さんのように大人になっていく世界がありました。毎年春になれば種を播き、秋になれば収穫をする世界があったのです。村には、

村人同士が支えあいながら、地域社会を永遠に循環させていく知恵が蓄積されていました。

こうして循環系の村人の暮らしと、自然の動きが関係を取り結び、農民たちの循環する時間世界を創造し、成立させていたのです。

おそらく、その頃は、時間は人間を支配するものではなかったことでしょう。なぜなら自然と関係を持ち、村の共同性と関係をもつなかに創造される時間が唯一の時間であり、人間も時間の創造者でありつづけてきたから、時間は自分の営みとともにあるものであって、けっして人間の外に確立された支配者ではなかったのです。

このような時間世界が存在していた間は、子どもたちも、自分がどんなふうになつていけばよいのかを知っていました。歳とともに大きくなっていく自分の役割をはたしていくこととともに、村の時間も存在しつづけるのです。

現代人たちが失ったのは、こんな時間世界であり、人間の存在の仕方でした。そしてそのとき、時間は人間の営みとともに創造されるのではなく、客観的な時間秩序であり、時間という価値基準に変わっていたのです。時間は、人間たちが他者と関係をとり結ぶなかに創造されるものから、人間を支配する客観的な基準になっていきました。

そのとき、人間たちは時間を使い捨てるようになっていったような気がします。人生の経営が^Dハ綻しないように、つねに、いまの時間を使い捨てるのです。

時間に支配されながら、同時に時間を手段として使い捨てる、ここに現代人の時間に対する習慣が生まれているように感じます。未来の自分を「他者」とすることによって創造される時間とは、未来のための手段にされ、使い捨てられていく時間でもあるのです。

よく現代とは使い捨てる時代だと言われますが、現代は時間を使い捨てていく時代だということは、あまり気づかれていないように思います。しかし、考えてみれば私たちの労働には、生活のために労働という時間を使い捨てる部分が、必ずふくまれています。子どもたちは E のために膨大な時間を使い捨てています。

とすると、時間を使い捨てるとは、どんなことを意味しているのでしょうか。それは、その時間とともに存在していた自分を

使い捨てることにほかなりません。

こうして、自分の存在を確立するために、自分自身を使い捨てながら生きていくという新しい人間たちが誕生しました。それが現代人たる私たちの姿だといってもよいでしょう。時間を使い捨てることによって、その時間とともにあった自分自身を使い捨てる、ここに現代という使い捨ての時代が展開していくのです。

このような生き方をするようになったとき、私たちは、人間がもっていた根本的な情熱を失ったような気がします。自分自身が時間とともに使い捨てられていくのなら、どうしてそのような自分の営みに情熱を持つことができるでしょうか。情熱をもつて何かを確立しても、それもまた使い捨てられていく過程のなかに、私たちは身をおいているのです。

その結果、ある課題を達成する必要性があると感じたときには、その課題を成し遂げようとはしますが、それもまた生きていく手段であって、人間的な情熱がそのような行為をさせているわけではないのです。

しかもこのような習慣を身につけた私たちは、次第に、日々存在している現実の自分と、本物の自分とが別の者であると感じるようにもなってきました。かつて実在哲学は、自分が何者でもなくなっていく、あるいは確かに自分は存在しているのに、だんだん自分が失われていくように感じる現代人の感覚を、現代の人々の不安と喪失感として問題にしました。確かに私たちは、精神のある部分で、いつも、何となく、そんなソ外感を感じているような気がします。

このような感覚が生じてくるのは、現代の人間たちが、つねに時間とともに自分自身の存在を使い捨てているからでしょう。たえず自分自身をつくりだしているのに、生みだされた現実の自分は、自分自身の手によって使い捨てつづけられているのです。つまり私たちは、自分で自分を使い捨てる習慣を、身につけてしまったのです。とすれば、使い捨てられていく自分が本物の自分なのか、それとも使い捨てつづける自分が本物の自分なのか、明らかにすることはできないでしょう。

こうして現代的な a がはじまり、そうして、そうであるがゆえに、 b を探したいというシヨウ動にか
られつづける精神をもちながら、私たちは暮らしているような気がするのです。

現代の子どもたちは、どんな時間の世界のなかで生きているのか、今日まで私たちは、このことに対して注意を払おうとしてこなかったように思います。もちろん、忙しすぎる子どもたちや、時間に追われる子どもたちのことはしばしば議論され、もっとゆったりした成長の時間を与えたいと、多くの人々は考えてもきました。しかしこの議論は、私には時間の使い方の議論にすぎなかったような気がします。

それは、現代人は忙しすぎる、もっと余暇をとろうと言っているのと同じレベルの議論であって、もちろんその必要性も私はけっして否定しませんが、それだけでは現代の時間世界に生きる人間の問題は解決しないのです。

時間がどのように存在しているのかは、人間がどのように存在しているのか、ということでもあります。なぜなら、人間は時間を存在させることによって、その時間とともに生きているからです。

子どもたちにとっても同じことがいえます。どんな時間世界とともに現代の子どもたちは生きているのか、そのことをドウ察しなければ、^F今日の子どもたちがかかえている問題は理解できないように私は感じます。

もっとも私は、子どもたちが大人とは異なる独特の時間世界を形成しているとは思っていません。仮にそのような時間世界があるとしても、それは自分のいまの位置を、関係的にとらえることのなかった幼年時代までのことで、どのような関係のなかに自分がいるのかをみるようになる少年時代になれば、そこには大人と何も変わることのない時間世界が、存在していると考えているのです。

子どもたちも、未来の自分の時間経営がハ綻しないように、現在の時間を手段として消費しています。自分だけの孤立した時間を意識しつつ、未来の自分を他者として、その他者と関係を結ぶことによって、現在の自分の時間を創造し、結果としては時計の時間に支配されながら、時計の時間の消費の仕方だけを問題にするしかなくなったのです。こうして、子どもたちもまた、現在の自分を時間とともに消費しつづけることによって、未来の自分の時間経営を実現する存在の仕方をつけたのです。

このような時間観、人生観、あるいは人間の生き方についての共通の精神の習慣が定着してしまえば、子どもたちの行動も共通性を帯びてくるはずです。未来のためにいまの時間をどう使うかだけが課題になり、もっとはつきり述べてしまえば、未来の

時間のためにどのように行動するのが、自分にとって利益になるかだけが関心事になってくるでしょう。

その点では、今日の子どもたちもまた小さな大人たちであり、小さな人生の経営者たちなのです。そうして、このような共通の精神の習慣を保有しきれない少数の子どもたちは、自分は何を得ようとしているのかを表現しきれないままに、精神のコン沌^④の中に投げ込まれていくのです。現代社会の時間に対する共通の精神の習慣と、自分自身もっている時間に対する精神の習慣との不調和があらわれ、その結果、存在させている時間世界が異なるがゆえに、現代社会の動きにのりきれない自分自身を感じつづけるしかないのです。

こうして、一方では自分の時間経営だけを考えつづける孤独な子どもたちが生まれ、他方ではそのような時間世界を共有できないために、二重の孤独感を味わっていく子どもたちが生まれてきます。そこから子どもたちのさまざまな「社会問題」が発生してきますが、現代社会は、こうした「社会問題」に対する知恵を、もちあわせてはいらないのです。なぜなら、どのような解決策もたいした意味をもたないからです。なぜ意味を持たないのか、それはさまざまな子どもたちの「社会問題」が生じてくる陰に、時間世界の不調和があるからであり、にもかかわらず、現代社会は多様な時間存在を許してはいないからです。そうして、そうであるかぎり、根本的な解決などできようはずありません。

その意味でも少年たちは、大人たちの時間世界を共有する小さな大人なのです。

問 1 二重傍線部イとロの説明として、最も適切なものを次から選べ。

1

- ① 幼年期の記憶はその場面だけのものであり、少年期の記憶は原因や状況も記憶しているものである
- ② 幼年期の記憶は前後関係をもつものであり、少年期の記憶は一時的な感情を記憶しているものである
- ③ 幼年期の記憶は主観的なものであり、少年期の記憶は客観的な情景を記憶しているものである
- ④ 幼年期の記憶と少年期の記憶のどちらも、いつまでも鮮明なものであり両者に違いはない
- ⑤ 幼年期の記憶は客観的なものであり、少年期の記憶は自己中心的な感情を記憶しているものである

問2 傍線部Aのように筆者が考えるのはなぜか。最も適切なものを次から選べ。

2

- ① 都市開発が進み、以前のように果実の実や沢ガニは身近な存在ではなくなったから
- ② 人口の減少が進み、将来は自分一人で生きていかなければならない若者が多いから
- ③ 自分が集団のなかで何をしようとしているのかを、表現できない子どもが増えているから
- ④ 時間が循環する世界の一秒と現実世界の一秒では長さにズレがあり、調和していないから
- ⑤ 周囲との関係における自己ではなく、未来の自分を確立させていくことに集中せざるを得ないから

問3 傍線部Bの具体例として、適切でないものを次から選べ。

3

- ① 自己管理を徹底した結果テストの点数が上がり満足感を得たこと
- ② 家族と山登りをした後に山頂で見たご来光を美しいと感じたこと
- ③ 近所のお婆さんにレンゲの花を摘んでもらってうれしかったこと
- ④ 村の人たちと協力して育てた稲が今年も収穫できたのをうれしく感じたこと
- ⑤ 文化祭でのクラスの出し物が成功して達成感を得たこと

問4 傍線部Cの時間世界を示すものとして、最も適切なものを次から選べ。

4

- ① 毎週同じ曜日に生ごみが回収されていくようなこと
- ② 夜明けごろに目覚め、夕暮れごろに仕事を終えるようなこと
- ③ 時間割通りに授業スケジュールが繰り返されるようなこと
- ④ オリンピックが四年ごとに開催されるようなこと
- ⑤ 一日が二十四時間で固定され繰り返し返されるようなこと

問5 傍線部Dとはどういうことか。最も適切なものを次から選べ。

5

- ① 自分以外の他者との関係をうまく結べるように常に話題を用意しておくこと
- ② さまざまな時間世界に存在できるように会社を設立すること
- ③ 未来の自分の存在を確立するために合理的な計画を立て実行すること
- ④ 現在の人付き合いを充実させるために労働し貯蓄を増やしておくこと
- ⑤ 人間の活動が自然環境に悪影響を与えず将来も持続できるようにすること

問6 空欄Eに入る言葉として、最も適切なものを次から選べ。

6

- ① 友人
- ② 小さな時間循環
- ③ ゲーム
- ④ 受験
- ⑤ お母さん

問7 空欄a・bに入る組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

7

- | | | | | |
|---|---|------|---|-------|
| ① | a | 時間管理 | b | 理想の自分 |
| ② | a | 時間管理 | b | 本物の自分 |
| ③ | a | 自己喪失 | b | 本物の自分 |
| ④ | a | 時間循環 | b | 将来の自分 |
| ⑤ | a | 時間循環 | b | 現実の自分 |

問 8

傍線部Fについて、筆者の考えと合致するものとして、最も適切なものを次から選べ。

8

- ① 現代の子どもたちは、少年期になれば大人と何ら変わらない時間世界を成立させ、未来の自分の時間経営を合理的に進めることを期待されており、子どもに対する要求としては過重であるという問題
- ② 現代社会では時間世界の不調和を解決できないので、自分の時間経営だけを考える子どもたちも、その世界を共有できない子どもたちも、孤独感を味わっているという問題
- ③ 現代の子どもたちは、自分だけの孤立した時間を意識し、未来の自分を他者として関係を結ぶことにより、結果としては時計の時間に支配されながら、時計時間の消費だけに留まってしまうという問題
- ④ 自分の時間経営だけを考える子どもたちは、どう行動することが未来の自分にとって有益かだけを考えるような利己的な子どもたちなので、そのような子どもの増加が日本の将来の不安につながるという問題
- ⑤ 現代の子どもたちの大多数は、人間の生き方についての共通の精神を持ち合わせているが、そうではない少数の子どもたちの考えを尊重する態度が見られないので、社会が不寛容であるという問題

問9 文中の二重傍部線⑦から⑩のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを次から選べ。

9 ア ハ綻

① ハ紋が広がる

② ガラスのハ片を拾う

③ それぞれにハ閥を作る

④ 二大会を制ハした

⑤ 調子に乗ってハ目を外す

10 イ ソ外感

① 意思のソ通を試みる

② 病気の進行をソ止する

③ 身体ソ成を評価する

④ 愛ソの良い店員

⑤ 裁判所にソ状を提出する

11 ウ ショウ動

① 計画をショウ認する

② 国産品の購入をショウ励する

③ ひどいショウ燥に駆られる

④ 彼の高ショウな生き方を見習う

⑤ 地球に隕石がショウ突した

12 エ ドウ察

① 夕食を食ドウで食べる

② 隣国とドウ盟を結ぶ

③ 幹が空ドウになった老木

④ 不和のドウ因を探る

⑤ 志望ドウ機を聞く

13 オ コン沌

① 将来に大きな禍コンを残す

② 今晚のコン立を考える

③ 貧コンの状態から立ち直る

④ 真実と嘘がコン在する

⑤ おもちゃを買ってとコン願する

第二問

左は、鎌田浩毅『理科系の読書術―インプットからアウトプットまでの28のヒント』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

本が難解なのは、著者と「フレームワーク」が合わないからではないかと、あるとき気がついた。フレームワークとは「考え方の枠組み」「思考パターン」「固定観念」のことである。

人は誰しも固有のフレームワークでものを考えている。よって、フレームワークの合う人同士は話が通じやすく、それが異なる人とは円^⑦カツなコミュニケーションが取りにくい。考え方の枠組みが違う場合には、つきあいがうまくいかないのだ。私たちはフレームワークに強く支配されている。たとえば、好きな本ばかり読もうとしたり、いつも決まった結論を下したりするのが、その例である。

私がフレームワークの重要性をはじめて認識したのは、専門の火山学を市民に伝えようとしたときだ。二〇〇〇年三月に北海道の有珠山^{うすざん}が噴火し、私は全国ネットのテレビのニュース番組で解説することになった。

私が言いたかったのは、「噴火予知には成功しており、今後も火山学者が観測データ^Aを見ているから心配ありません」という趣旨だった。しかし、視聴者には「大学の専門家が怖い顔^{こわ}をして、早口でまくしたてている。有珠山に大変なことが起こりそうだ」という、私の意図とは逆のメッセージが伝わってしまった。

ここで私はフレームワークに「壁」があることを知った。市民と科学者とは、自然現象に対する認識がまったくと言っていいほど異なる。一般市民のフレームワークに通じなければ、科学者の言いたいことは何も伝わらないことを痛感したのである。

ア

よいコミュニケーションのキーポイントは、このフレームワークにある。自分と他人のフレームワークの違いを意識することが、人づきあい上達の秘訣^{けつ}なのである。自分のフレームワークを相手へ上手に橋わたしできたときに、意思のソ通がはじめてうまくいく。私はこの方法を「フレームワーク法」と名づけた。

この方法を、難しい文章や本を読み解くことに応用してみよう。フレームワーク法は、知的でややこしい抽象的な内容を理解しようとするときにもっとも役に立つ。この能力を身につければ、新聞・雑誌のわかりにくい記事や難解な哲学書を読み解くときにも威力を発揮するのである。どんな著者でも固有のフレームワークを持っている。まず著者のフレームワークとリテラシーを知ることから始めてみよう。

イ

世のなかには、なぜか自分には理解しづらい文章がある。

a

、内容に興味を持たないが、読まなければならないレポートや本があるときは、どうすればよいか。

ここでは「相手の関心に関心を持つ」というテクニックを使う。「相手の関心に関心を持つ」とは、相手の置かれた立場や状況に関心を持つてから、考えの中身へ迫ることを言う。どんな著者も何らかの意図や関心があつて外部へ意思表示しているのだが、著者の関心にこちらの関心を寄せるのである。ここでは短く「関心法」と呼んでみよう。

「関心法」は、自分に遠い専門分野の新聞記事を読み解くときにも有効である。新聞記事は、起きた事件を事実に沿って正確かつ公平に記述しようとする。そこには記者の感情や価値観を入れないことが前提となっている。そうした前提を念頭に置かないで新聞記事を読むと、おもしろくも何ともないと腹を立てることになる。

ウ

この方法は、官僚の文章や裁判所の判決文、代議士の国会答弁を読み解く際にも使える。わかりにくいと言われる官僚の文章も、その人の立場を知り、また官僚のよく使う決まり文句に慣れていけば、文章の意図を理解するのにさほど困難はない。

基本的には①官僚の文章は、前例をトウ襲したものである。彼らは保守的なフレームワークを維持するのが仕事だから、この点さえ押さえれば、大して難解な内容を述べてはいないことに気づくだろう。哲学書や文学作品のほうが、実ははるかに頭を使って書かれていることが多い。

b

、言葉を分解し、それぞれの機能を明らかにして、全体の内容に迫る。そして、何ごともそうなのだが、最後は

慣れである。官僚の文章には型というものがある。それに慣れることが重要である。

私自身、若い頃に官庁の外郭団体（新エネルギー・産業技術総合開発機構）に勤務した経験があるが、一年も経つと誰にも揚げ足を取られない、すなわち、組織をきちんと防衛するような文章が書けるようになった。いったん型が見えてくると、他の役所が出した通達文のポイントも、たちどころにわかってくる。

最近ではAI（人工知能）が凡例を学習して、裁判官よりも的確な指示を出し、官僚よりも正確な文書を作成できるまでに進化した。そもそもAIに可能なことは、人間にもできるのであり、型がわかれば誰でも読みこなせるものである。

わけのわからない話をしているように聞こえる国会答弁も、まったく同じ構造である。議員には議員のフレームワークがあり、その範疇^{はんちゆう}で相手にもっとも効果的なプレゼンテーション^⑦をしている。

いるわけだから、はじめて国会中^⑧ケイを見た視聴者がついていけないのは当然である。このような場合には、前もって新聞記事などを読んでおき、議員が持つフレームワークを確認しておく必要がある。

エ

一見難しい内容のように感じる場合でも、実は難しいのは表面的な言葉だけである。著者の使っている言葉が読者のフレームワークに合っていないので、難解に感じるだけなのだ。

もしやさしい言葉に代えてもらったら、内容は実に簡単だということも多い。哲学書であれ、科学書であれ、官僚や政治家の文章であれ、言葉のトリックを知るだけでかなり理解できる。

このフレームワークを決める最大の要素は、そこに込められた言葉の意味である。いわば、それぞれの世界で独自に用いられている言葉の「ラベル」であり、ラベルの背後には著者固有のフレームワークがある。難しい専門用語とは、著者が自分の考えを圧縮して入れ込んだだけのものなのである。

まず、著者が自分のフレームワークに基づいて用いているラベルに照準を当てて、ここだけを解読することから始めてみよう。名づけて「ラベル解読法」である。著者の貼ったラベルの背後にあるフレームワークを解読する、と言ってもよいだろう。ここ

で、「言葉の意味」ではなく「フレームワーク」をあえてターゲットとする点に注意を向けていただきたい。^B

たとえば、どの章にも繰り返し用いられるキーワードがあったとする。これは何度も使われているので、意味がよくわからなくても、キーワードであることは形式的に判断できる。英語の文章で、単語の正確な意味がわからなくとも、何度も出てくるので文中で大事な単語であることがわかるのと同じである。このような構造がわかれば、あとは比較的スムーズに読み進めることができる。

オ

キーワードがわかったあとで、気をつけなければいけないことがある。キーワードの字面から推測される意味と、文章中での意味とがしばしば異なる場合があるのだ。読者がイメージする内容と、著者がイメージしたものが違っていき、読者は何のことを言っているのかわからなくなってしまうのである。

この場合、読者は自分のイメージをいったん忘れ、著者のイメージに合わせてなければならない。著者のフレームワークと読者のフレームワークが違っていきるのは当たり前である。さらに昔の本を読む場合には、時代も常識も異なるので多少面倒なことも多いのだが、読者のほうから合わせてあげればよい。

こうして、常に著者の気持ちに沿って、そのフレームワークに合わせて、本を読み進めるのである。これで、哲学者だろうが宗教家だろうが科学者だろうが、自由に話ができるのである。難解と言われる本の著者特有の表現、すなわち「ラベル」に合わせるのだ。相手のフレームワークに合わせていけば、読書上の問題はほとんど解決してしまう。

さて、私は文系の人から「理系的な考え方の特徴とは何ですか？」としばしば聞かれる。こういうときには必ず「棚上げ法ではないでしょうか」と答える。^C

棚上げ法とは、現在わからないこと、うまくいかないことは無理に理解しよう、完成させようとはせずに、とりあえず先へ進む方法だ。何かを調べていてわからないときに、それを一時的に棚上げして先へ進むことを言う。中身の不明なブラックボックスはひとまず置いて、次の仕事に取りかかるという方法である。

棚上げ法は身近なところでも使いがある。たとえば、三〇分ほど調べものをしてても埒^{らち}があかない場合、そのあと五時間を費やしてもわからないものだ。ところが、思いきって棚上げて先へ進んでみると、いつの間にか解決していることがある。全体像が見えてくると別の解決策が見つかるからだ。このように、時間と労力を節約するのが棚上げ法のコツなのである。

これは英文や難しい古典を読む際にも有効なので、具体的に述べてみよう。辞書を引きながら一語一語丁寧に訳していくと、いつしか根気が続かなくなり、全体で何を述べているか判然としないまま時間切れになってしまう。こうした完壁主義^{かんぺきしぎ}の落とし穴に陥るのを防ぐ方法である。

たとえば、文中に出てきた philosophy という単語の意味がわからなかったとしよう。全体を通読することを優先し、その単語はとりあえず棚上げて先を読む。そのうち前後の文脈からおおよその意味が判別し、「考え方」のようなものではないかと推察できるようになる。すぐには「哲学」という訳語に到達できないかもしれないが、それに近い概念を表していることがわかるようになる。

かつて物理学者のアインシュタインが、重力場方程式に宇宙項を作って導入したのもこれと似ている。彼は宇宙が膨張も収縮もしないことを主張するために、その場しのぎのホウ策^①として、宇宙項というものをつけ加えた。

これは学者たちにすこぶる評判が悪く、アインシュタイン自身も撤回しようかとずいぶん悩んだそうである。ところが近年になって、宇宙の膨張が加速していることが判明し、アインシュタインの宇宙項が物理学の世界に復活した。

ここで重要なことは、ある時間をかけても進まなければ、それ以上は拘泥しないということだ。困難に直面したときの見切り発車が、棚上げ法のポイントである。

もう一つ、最近の科学の例を挙げたい。ヒトゲノムの解析を思いうかべてみよう。人間のゲノムというのは何十億もあるのだが、世界中の生物学者が寄ってたかつて、できるところから解明していった。難しい箇所は後回しにする。最初は虫食い状態だったが、いつの間にか全部が埋まったのである。

こういう棚上げ法のできる人が、実は科学者向きだとも言えよう。さらに言えば、

D

で、一つ一つの物事をきつ

ちりと片づけられる人は科学者としてはあまり成功しないのだ。

自然科学の世界には、自分のフレームワークでは理解不能な現象がたくさんあるので、

D

に一つずつ解決しよう

としたら、成功どころかノイローゼになってしまうだろう。アインシュタインが宇宙項を作らなければ、現在の宇宙論の展開は生まれなかった。棚上げ法の名人でもあった彼は、ベートーヴェンのように眉間にシワを寄せて、ムンクの「叫び」のような表情をする必要がなかった。それを物語るようにアインシュタインは、舌を出したおどけた有名な写真を残している。

アインシュタインでなくても、われわれも考え込んで頭のリズムを止めてはいけないのである。壁にぶつかった問題の解決に力を注ぐとせずに、いったんストップし、もう少し先を眺めてみるのだ。

その根底にあるのが「不完全法」という考え方である。仕事で一番大事なことは完璧な達成ではなく、最後までやり抜くことだ。われわれ研究者は、データが一〇〇パーセント揃わなくても、論文を発表しなければならない。一方、たとえ完璧であっても発表が他人より一日でも遅れたら、評価はゼロになる。よって、不完全なデータでもそれを活かしてどこまで成果とするかに勝負をかける。

ノーベル賞をとるような科学論文でも、当初の計画を完璧に達成して発表されたものは皆無と言っていい。ポイントは、限られた材料でいかに質の高い論文を完成させるかだ。多少のアラがあっても、期限までに許ヨウ範囲のクオリティで全体を完成させること。私を含め理系の研究者は、常に「期限」と「質」とのバランスを念頭に置いている。

新しい発想やイメージがどんどん湧きでてくるさなかでも、考えが行き詰まることはよくある。ここで必要なのは、無理にそのアイデアを押し進めようとしない技術である。

ここでは「不完全である勇氣」を持つことがとても大切だ。人は誰でも完全を好むが、「見切り発車」がその要諦である。完璧を求めるあまり、不安の底なし沼に陥ることもない。メンタル面においてもすぐれた戦術と言えよう。

問1 傍線部Aの理由を筆者はどのようにとらえているか。最も適切なものを次から選べ。

14

- ① 著者が火山学の専門家だと示され、視聴者が親近感を抱けなかったから
- ② 著者の解説が早口になったことで、フレームワークの「壁」ができてしまったから
- ③ 火山の噴火はめったにない自然現象であり、視聴者にとって関心の持てる内容だったから
- ④ 著者と視聴者の間で一般人のフレームワークが共有されていたから
- ⑤ 著者と視聴者の間にはフレームワークの「壁」があったから

問2 次の一文が入る最も適切な箇所を、空欄アからオの中から選べ。

15

フレームワークの橋わたしが上手にできるには準備が必要だというのは、この場合も同じである。

- ① ア
- ② イ
- ③ ウ
- ④ エ
- ⑤ オ

問3 空欄aからcに入る語の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

16

- | | | | | | | |
|---|---|-------|---|------|---|------|
| ① | a | しかし | b | まず | c | すなわち |
| ② | a | しかし | b | ところが | c | まず |
| ③ | a | したがって | b | まず | c | たしかに |
| ④ | a | やはり | b | ところが | c | たしかに |
| ⑤ | a | やはり | b | すなわち | c | さらに |

問 4 傍線部Bの説明として、最も適切なものを次から選べ。

17

① あえてその言葉に「ラベル」を付した著者の思考パターンにしたがうことで、言葉の背後にある著者の生き様を理解しようとする事

② ある言葉をやさしい言葉に代えて理解しようとするのではなく、あえて著者と読者のその言葉に対するイメージを比較してすり合わせようとする事

③ ある言葉がその文章のキーワードであると気づくことに加え、その言葉の使い方が時代に対して適当であるかにあえて的を絞って意味を考えるとすること

④ 自分のイメージをもとにしてある言葉の意味を理解しようとするのではなく、あえて著者の考え方の枠組みに合わせてそれを理解しようとする事

⑤ 固定観念にとらわれないように気をつけ、言葉の本質を表現して伝えようとする著者の感情にあえて狙いを定めるということ

問 5 傍線部Cにもとづく行動として、最も適切なものを次から選べ。

18

① あらかじめ決めておいた食材に旬の野菜も追加して、予定していたものの他にもう一品作る

② 読み方がわからない漢字の読み方を予想したあとで、人に読み方を尋ねる

③ どこに置けばよいかわからないパズルのピースを後回しにして、置く場所がわかるピースから置いていく

④ 難しい文章を読むと内容がわからず立ち止まることがあるが、諦めずにわかるまで考える

⑤ けんかの仲裁をするときに、双方からけんかの理由を聞くのではなく一方からのみ理由を聞く

問6 空欄Dに当てはまる最も適切なものを次から選べ。

19

① 革新的

② 几帳面

③ 樂觀的

④ 破天荒

⑤ 悲觀的

問7 傍線部Eの理由として、最も適切なものを次から選べ。

20

① 困難を乗り越えることばかりに拘泥すると、かえって物事を完璧に達成することから遠ざかってしまうから

② 完璧を目指して立ち止まりながら仕事をする不安を抱きやすくなり、最後までやり抜くことが妨げられるから

③ 完璧なものよりも、期限までに許ヨウ範囲の質で完成させたもののほうが新しい発想の源泉になるから

④ 時間がかかってでも著者からのメッセージを理解しようとする姿勢が高く評価されるから

⑤ 難題をひとつずつ解決していくことへのこだわりを捨てて仕事に取り組むことで、精神が安定するから

問 8 本文の内容と合致するものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

21

- ① 「棚上げ法」と「不完全法」を日常生活に取り入れたうえで、期限までに完璧に物事を達成できるようになることが好ましい
- ② 物事を一つ一つ時間をかけて丁寧に扱い、ゆっくりでも限られた材料で質の高い論文を完成させることのできる人は、科学者に向いている
- ③ 日本人がフレームワークの橋わたしについて学び、実行するときには、手始めに官僚の文章を読んでその型を知るのがよい
- ④ 文章を読むにあたっては、キーワードの字面から推測される意味で十分に内容を理解したあとに、著者がイメージしている内容を推測するのがよい
- ⑤ 難解だと感じる文章でも、著者の意図をくみ取することに努め、時には全体の通読を優先すると、最終的にはその文章をよりよく理解することにつながる

問9 文中の二重傍線部⑦から⑩のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを次から選べ。

22

⑦ 円カッ

① 斜面をカッ落する

② 話をカッ愛する

③ めざましいカッ躍

④ 優秀な人材をカッ望する

⑤ 警察署の管カッ

23

⑧ トウ襲

① 過トウな請求額

② 雑トウに紛れる

③ 物体のトウ過

④ 新しい時代のトウ来

⑤ 馬耳トウ風

24

⑨ 中ケイ

① ケイ谷を散策する

② 長ケイからの電話

③ ケイ続は力なり

④ 絶ケイを眺める

⑤ ケイ虔^{けん}な態度をとる

25

⑩ ホウ策

① 旧遊の地を再ホウする

② ホウ律事務所

③ 伝家のホウ刀

④ 社会的ホウ撰の概念

⑤ 嘘もホウ便

26

⑪ 許ヨウ

① ヨウ姿端麗

② ヨウ務をこなす

③ 昔の歌ヨウ曲

④ ヨウ怪をモチーフにする

⑤ 斜ヨウの差し込み